

---

# FLORA KANAGAWA

S e p . 1 0 . 1 9 9 2      N o . 3 4

神奈川県植物誌調査会ニュース第34号

〒231 横浜市中区南仲通 5-60 神奈川県立博物館内 神奈川県植物誌調査会  
TEL 045-201-0926・振替 横浜 3-10195

---



ワタゲハナゲルマ *Arctotheca calendula*  
(吉川アサ子撮影 関連記事 P.368)

## 目 次

吉川アサ子：じゅうたんばくげき—帰化植物採集記—	368
勝山輝男：帰化植物がゾロゾロ	368
宮崎 卓：相模原—1メッシュへの追加植物	373
城川四郎：ハマウツボについて	374
小原 敬：語尾が—aceae でない科名	376
1991年度各メッシュ追加植物リスト その2 (県立博物館分)	376
事務局より	378

## じゅうたんばくげき・・・帰化植物採集記

(吉川アサ子)

5月2日 買物にでかける際にバスを途中下車して、かねてより是非調べたいところへ足を向けてみた。新田間川の埋立地である。昨年トゲオナモミをはじめカヤツリグサ科を数多く採集できた幸運の場所である。立入禁止の柵を一周すると、ゲンゲが目に入った。おもしろそうなのでソッと中へ入り、内側から逆周りに歩いてみると、西区で未採集の植物がゾロゾロと現れた。帰りのバスの中で予定していた買物を忘れたことに気がついたが後の祭であった。

5月4日 午前3時に目が覚めた。「まだ早い」ともう一度寝ることにした。ところが、2日前の埋立地が気になって寝ていられない。何か変な予感がして眠れない。何だ可だのと5時に起き、手早く家事を済ませると家を出た。「どの方面」と主人が聞くので、私は「新田間川の埋立地」と答えた。主人は「何だ同じ場所をじゅうたんばくげきか」、そして「気を付けて」と一言。

地面を這う変わったマメ科植物を見つけた。腰を屈めてよく見ると、帰化植物図鑑で見ていたジモグリツメクサである。はっとして我に帰ったその時には、採集袋の中に納まっていた。さらに周囲を見渡すと、はるか先に黄色い花がチラホラ見えた。タンポポにしては変だ。初めて見るその花は痩せたガーベラのような植物であった。今度は、あわてて採らず、カメラで写し、丁寧に掘り採る。この植物は南アフリカ原産でオーストラリアなどに帰化しているキク科のアルクトテカ・カレンドウラ（後にワタゲハナグルマなる和名がついていることが判明、表紙写真）であった。

5月7日 午前4時起床。静かに、静かに標本の新聞紙を取り替えていた。「おい、こんな早くから何しているの」と言われてギョッとする。音をたてぬようにしていたのに。「まさに病気だね」とも言われた。昼食に帰る約束で、満員バスに乗り、例の埋立地へ向かった。シロツメクサの根元を1株1株丹念に調べたところ、変にいじけた小さなものが目に入った。手に取ってルーペで見てみると毛が多い。これはビロードアカツメクサであった。昼食後、再び同じ場所に戻ると、今度は一見風変りなウマゴヤシの仲間を発見した。葉の切れ込みがおもしろい特徴をもっている。後日、この植物は地中海沿岸原産のウマゴヤシの仲間と判明、葉の特徴からキレハウマゴヤシと名付け

た。

5月14日 新聞紙の取り替え作業と西区の埋立地への日参で、足に水が溜り痛んだ。医者には「年齢を考えなさい」といい、「歩かなければ治る」とあたりまえなことを申す。

ところが、病院を出たその足はいつのまにか例の埋立地へと向かっていた。

この数日は雨降り続きで、たまに晴れた日には、我が家の物干しは新聞紙の溝鑑飾。通行人が首をかき上げて、二階の物干しを見上げていた。

5月は、2日から31日まで、調査に出た日数は10日。午前、午後に分けて出た回数は16回。その結果、保土ヶ谷区は3点、西区は39点が追加された。

じゅうたんばくげきとは主人が見つけた私のニックネーム。巻いてあるじゅうたんを縦横に隙間なく広げていくことで、見残しや、目こぼしは一切許さない。その方式を応用したのが戦争中の爆撃であった。僅かなものでも見落さないやり方に共通性があるのでニックネームの由来となったらしい。

## 帰化植物がゾロゾロ

(勝山輝男)

今年はなぜか神奈川県新産や日本新産と思われる帰化植物がつぎつぎと持ち込まれた。このうち正体が判明したものを報告する。日本新産の帰化植物については、まだ現地産の標本との比較は行っていない。後日、詳細に報告したいと考える。

### (1) ワタゲハナグルマ (アルクトテカ・カレンドウラ) [キク科]

*Arctotheca calendula* (L.) Levyns

吉川アサ子さんが西区北幸町で採集された (May, 4, 1992)。園芸植物のガーベラに似た草姿のキク科の草本である。葉は羽状に深裂し、下面には白軟毛を密生する。花茎には黒褐色の粗い毛がある。頭花は直径3~4cm。今回採集されたものは、舌状花は全体に淡黄色で、基部が鮮黄色であったが、花の色の濃淡には変化があるようだ。南アフリカ原産で、オーストラリアに帰化し耕地や路傍の雑草となっているらしい。

三重県の大田久次が採集し、浅井(1975、植物研究雑誌 50:313)がワタゲハナグルマと新称している。大田(1985、三重県帰化植物誌)にカ

ラー写真が出ている。小学館（1990，園芸植物大事典）にはアルクトテカ・カレンドウラの見出しで写真とともに紹介され，日本では栽培されていないと書かれている。おそらくオーストラリア経由で持ち込まれたものであろう。

(2) キレハウマゴヤシ [マメ科]

*Medicago lanciniata* (L.) Mill.

吉川アサ子さんが西区楠町で発見 (May, 7, 1992)。小葉が矢はず状に切れ込み，果実には鉤刺が密生。FLORA, D'ITALIA や FLORA PALAESTINA によく一致する図が載っていて判明した。日本新産と思われたので，葉の形状からキレハウマゴヤシと命名した。ところが，すでに大田 (1985, 三重県帰化植物誌) に学名不詳のまま同じキレハウマゴヤシの名前で写真が掲載されていた。標本は見えないが，写真の葉や果実の形態はそっくりなので，同じものと判断し，和名はキレハウマゴヤシとして整理することにした。



キレハウマゴヤシ (×2)



キレハウマゴヤシ (×1/2)

(3) セイヨウヤブジラミ [セリ科]

*Torilis leptophylla* (L.) Reichenb.fil.

吉川アサ子さんが西沢楠町で採集 (May, 7, 1992). ヨーロッパ, 地中海沿岸, 西アジア原産. 藤沢市で記録 (浅井, 1963, 植物研究雑誌

38:349) があったが, 植物誌調査では見つかっていなかった. 長田 (1972), 日本帰化植物図鑑, 北隆館, P.90に記述はあるが, 図は載っていない. 前述の浅井 (1963) には写真が載っている. ゼロックスによる陰影を示す.



セイヨウヤブジラミ (×1/2)

ヒメヤエムグラ (×1)

(4) ヒメヤエムグラ (新称) [アカネ科]

*Galium divaricatum* Pourr. ex Lam.

国分寺市在住の皆川和子さんからトゲナシヤエムグラではないかという標本が送られてきた。川崎市麻生区上麻生4丁目の宅地造成地で採集された (June, 16, 1992)。たしかに果実は平滑であるが、葉の縁には逆刺ではなく上向きの刺毛があるので異なるものと考えた。果実が直径0.5mmと小さく平滑なこと、茎には逆刺があるが葉には上向きの刺毛があること、花柄が細くて比較的長いことなどから南ヨーロッパ原産でアメリカやニュージーランドにも帰化している *G. divaricatum* と判断した。近縁のものに *G. parisiense* L. があるが、これは果実の直径が1mmあり、表面に逆刺がある。しかし、両者を同一視している著書もあり、問題がありそうである。とりあえず、上記の和名をつけ、*G. divaricatum* として整理した。ゼロックスによる陰影を示す。

(5) アメリカミコシガヤ (新称) [カヤツリグサ科]

*Carex vulpinoidea* Michx.

吉川アサ子さんが川崎市麻生区上麻生3丁目の宅地造成地で採集された (July, 5, 1992)。そう生し、高さ60~170cm。全体にミコシガヤに似ているが、苞葉は発達せず、ミノボロスゲ程度である。小穂は先端に雄花、基部に雌花をつける。雌花の鱗片の先はのぎ状に尖る。果胞は扁平で長さ約3mm、背面に3脈が目立つ他はほとんど無脈、くちばしの縁はざらつき、口部は鋭く2裂する。果実は長さ約1.7mmで、花柱基部が残る。柱頭は2個である。苞の鞘部腹面は白膜質で、オオカワズスゲにあるのと同じようなしわが生じる。

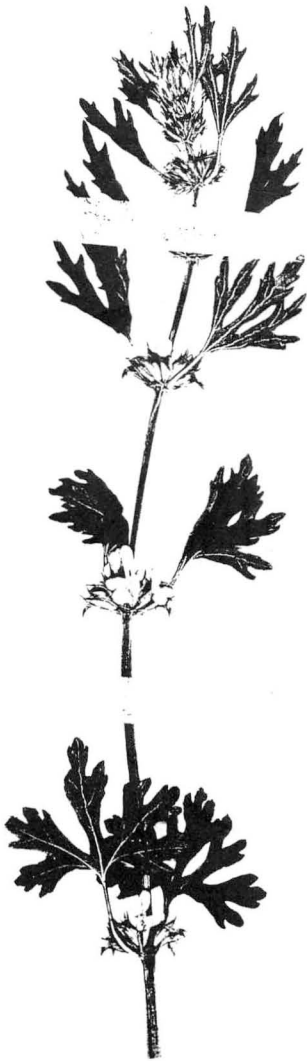
北アメリカに広く分布する *C. vulpinoidea* と思われるが、この種は花序の長さや果胞のくちばしの長さなどに変異が多いようだ。*C. triangularis* Boeck. や *C. annectans* Bickn. を分ける考えもある。また、*C. fissa* Mack. も似た種類のような。上記の和名を与え、*C. vulpinoidea* として整理したが、アメリカ産の標本と比較して最終的な結論を出したいと考えている。



(6) ミナトメハジキ (新称) [シソ科]

*Leonurus cardiaca* L.?

中区新港埠頭で採集(勝山輝男, Apr. 22, 1992).  
メハジキに似るが花は白色で小さく, 上唇の外面  
に毛があり, がく片は針状に尖る. 花は4月に咲  
き始め, 6月には結実して枯れてしまった. ヨー  
ロッパ原産の上記の学名のもと花やがくの形態  
は一致する. しかし, ヨーロッパやアメリカの図  
鑑に出ている図と葉の形があまり似ていない. と  
りあえず和名をあたえて整理しておくが, 後日標  
本でチェックしたいと考えている. ゼロックスに  
よる陰影を示す.



ミナトメハジキ (×1)

この他以下の種類が確認された. 詳細は図鑑を参  
照されたい.

(7) ホザキマンテマ [ナデシコ科]

*Silene dichotoma* Ehrh.

吉川アサ子さんが西区北幸町で採集 (June, 5,  
1992). 長田 (1972), 日本帰化植物図鑑, 北隆  
館, P.161参照. 長田 (1976), 原色日本帰化植  
物図鑑, 保育社, P.302参照. 神奈川県新産.

(8) エゾスズシロ [アブラナ科]

*Erysimum cheiranthoides* L.

吉川アサ子さんが西区北幸町で採集 (May, 31,  
1992). 長田 (1976), 原色日本帰化植物図鑑,  
保育社, P.273参照. 横浜港の記録があるが, 植  
物誌調査では見つかっていなかった.

(9) ビロードアカツメクサ [マメ科]

*Trifolium hirtum* All.

吉川アサ子さんが西区楠町で採集 (May, 7,  
1992). 長田 (1972), 日本帰化植物図鑑, 北隆  
館, P.122参照. 神奈川県新産.

(10) ダンゴツメクサ [マメ科]

*Trifolium glomeratum* L.

吉川アサ子さんが西区楠町で採集 (May, 7, 199  
2). 長田 (1972), 日本帰化植物図鑑, 北隆  
館, P.121参照. 長田 (1976), 原色日本帰化植  
物図鑑, 保育社, P.230参照. 神奈川県新産.

(11) ジモグリツメクサ [マメ科]

*Trifolium subterraneum* L.

吉川アサ子さんが西区楠町で採集 (May, 7,  
1992). 長田 (1972), 日本帰化植物図鑑, 北隆  
館, P.120参照. 神奈川県新産.

(12) セイヨウヒキヨモギ [ゴマノハグサ科]

*Parentucellia viscosa* (L.) Caruel

国分寺市在住の皆川和子さんが麻生区上麻生4  
丁目で採集 (June, 16, 1992). 長田 (1976),  
原色日本帰化植物図鑑, 保育社, P.104参照. 1976  
年に横浜港で記録されていたが, 植物誌調査では  
見つかっていなかった.

(13) ホソセイヨウヌカボ [イネ科]

*Apera interrupta* (L.) Beauv.

佐藤恭子さんが清川村札掛で採集 (May, 29,  
1991). 長田 (1989), 日本イネ科植物図譜, 平  
凡社, P.352参照. 神奈川県新産.

## 相模原－1 メッシュへの追加植物

(宮崎卓)

今年5月から、相模原市の相模川流域の望地、田名地区(分布図メッシュ相模原－1)を中心に植物調査を行ってきた。その際に、植物誌調査時の分布図メッシュから脱落していたものがいくらか確認できたので報告する。

今回の調査の詳細は地元相模原市のさがみの植物友の会会報に報告する予定である。さがみの植物友の会会報との内容的な重複を避けるため、ここでは分布図メッシュの補足になるものをいくつか報告するとどめる。

### (1) ナチシケンダ *Deparia petersinii*

近縁のシケンダ類(*Deparia*属 *Athyriopsis* 節)と紛らわしいため、今まで相模原のメッシュでは見落とされてきた可能性が高い。葉身の形と大きさは非常に変化に富み、本種の生態写真が他のシケンダ類(たいていはホソバシケンダ)の生態写真として図鑑などに載せられていることもある。しかし、根茎上の葉の間隔や胞膜の形質(辺縁の鋸歯、半円状楕円形の形)などの形質に関してはむしろ近縁種よりも変異性が少なく、この点に注意すれば本種の認識は難しくない。

望地の断崖上の道路端、民家の石垣で1個体確認した。確認した個体は葉身が細く、葉柄を含めた長さは20cmほどでホソバシケンダ似の型であった。

### (2) タカネマスクサ *Carex planata*

植物誌の分布図では箱根や三浦半島にまともな点が打たれているが、それ以外では緑区－1で記録されているだけであり、相模原への分布は多摩丘陵(緑区)からの延長とも考えられる。

望地～谷原間の斜面林のへりに1個体確認した。付近に土捨て場があり、他所から持ち込まれた可能性が全くないわけではないが、タカネマスクサ自身が林縁や山道のふちの環境に生えるため、自生のものとして報告する。現地はススキなどの繁った人為的な環境である。

### (3) イケノヤナギ *Salix × ikenoana*

タチヤナギとオノエヤナギの雑種である。植物誌には稀ではないと記されているが、相模原－1メッシュの標本は神奈川県博に入らなかった(植物誌には分布図が載っていない)。

確認地は新昭和橋(相模原－1と2の境)の少し上流の川原で、両母種に混じって5～6個体生育していた。確認時には種までは解らなかったが、後日神奈川県博のヤナギ類と比較した結果、タチヤナギに比べて葉身が長いこと、オノエヤナギに比べて若葉しか裏面に絹毛を持たず、葉縁の鋸歯が多少顕著であることなどから本雑種と同定した。自生地の周辺にはタチヤナギとオノエヤナギが普通に見られ、今後の調査によってはさらに何個体かのイケノヤナギが見いだせる可能性もある。

### (4) カザグルマ *Clematis patens*

植物誌の分布図には南足柄－3と保土ヶ谷(絶滅)に点が打たれているだけであるが、かつては多摩丘陵地域(東京都側を含む)の谷戸に点々と見られていたようである。今回はその多摩丘陵の隣接地、相模原台地での分布確認となる。確認した個体は白花品で、望地の断崖下の用水路わきに2～3個体が一群れになっており、アズマネザサなど林縁の植物に絡みついて生育していた。本種は確認した個体数も少なかったし、また稀なものなので大切にしたい植物である。

### (5) バイカウツギ *Philadelphus satumi*

山地生の植物(植物誌の分布型ミズナラ型)で相模原に隣接する愛川や城山のメッシュでは記録がある。

望地弁天キャンプ場の上の斜面林(かなりの急傾斜)で少数の個体が確認できた。同じ斜面林内には斜面上の民家から逸出したチャ、ミヤコワスレ、マサキ(生け垣に使われていたものでツルオオバマサギではないと思う)などが見られたことなどから、観賞価値のある本種に対しても人為分布の可能性を危惧したが、付近の人家に植栽品が見当らなかったことなどから自生品として報告することにした。

### (6) ウラジロノキ *Sorbus japonicus*

山地生の植物であり、相模原市のような低地域への分布は注目される。丹沢方面には広く分布し、相模原に隣接する愛川や城山のメッシュには記録されているが、これらは高所での記録である。

望地の断崖上の斜面林内で1個体、樹高4～5mのものを確認した。確認した個体の周辺には幼

木など別の個体は全く見られず、断崖上に遺存したものである様にもうかがえた。

#### (7) カラメドハギ *Lespedeza juncea*

植物誌では相模原-2のメッシュのみで記録のある大陸系の植物である。今回は『植物誌』の相模原-1のメッシュにあたる、望地弁天キャンプ場付近の川原で自生しているのが確認できた。メッシュNo.では別になるが、実際は『植物誌』に引用された産地(※)よりも2kmほどの相模川上流である。

確認できた個体数は20~30株と比較的多かった。個体に花はなかったが、茎が紫色を帯びて一層多毛で、葉に網目状の葉脈が顕著であることでメドハギと区別出来た(なお、秋に花のついた完全な標本を採集するつもりである)。

※県博の標本産地は昭和橋上流で、1985年10月25日に高橋秀男氏により採集されたものである。

#### (8) オオカラスノエンドウ *Vicia sativa*

ヨーロッパ原産の帰化植物であるが、植物誌では伊勢原-2メッシュでしか記録されていない。記録の少ないのは実際に分布が広がってないこともあるが、萼歯の長さや萼の毛の形質を認識しないとカラスノエンドウ(ヤハズノエンドウ)の大型品と紛らわしいためでもあろう。

今回の調査では、新昭和橋付近の相模川河川敷で1個体確認できた。標本採集後に萼の特徴から同定したので、自生地は株数は数えられなかった。採集時はカラスノエンジウに比べ、全体に大型であるのと花期が少し遅い(確認したのは6月)ことしか気に留めていなかった。

#### (9) ノジトラノオ *Lysimachia barystachys*

[サクラソウ科]

相模原市ではすでに相模原-4メッシュでの記録があるが、今回は望地の土手に30個体ほどがまとまって生育しているのを確認した。

本種はヌマトラノオやオカトラノオとは一見して異なるが、確認した個体は少毛品で、いくらかイヌヌマトラノオ(オカトラノオ×ヌマトラノオ)と紛らわしかった。しかし、茎には少ないながらも開出した長毛(短く縮れるオカトラノオの毛とは質が異なる)があること、花序の形はイヌヌマトラノオそっくりであるが、花の咲いている部分が花序の横に曲がる曲部に限られること(イ

ヌマトラノオは花序の直立部にも花を咲かせる)などはノジトラノオの特徴をはっきりと有していた。

本種は県内でも減少している植物であり、1箇所に30個体ほどの個体数が見られるのは珍しいのではないかと思う。

#### 主な参考文献

神奈川県植物誌調査会編:『神奈川県植物誌 1988』,神奈川県立博物館,1988年。相模原市教育委員会編:『相模原市の植生』,相模原市教育委員会,1988年。

高橋秀男:「フォッサマグナ要素の植物」,『神奈川県立博物館調査研究報告 自然科学 自然科学第2号』,1971年。

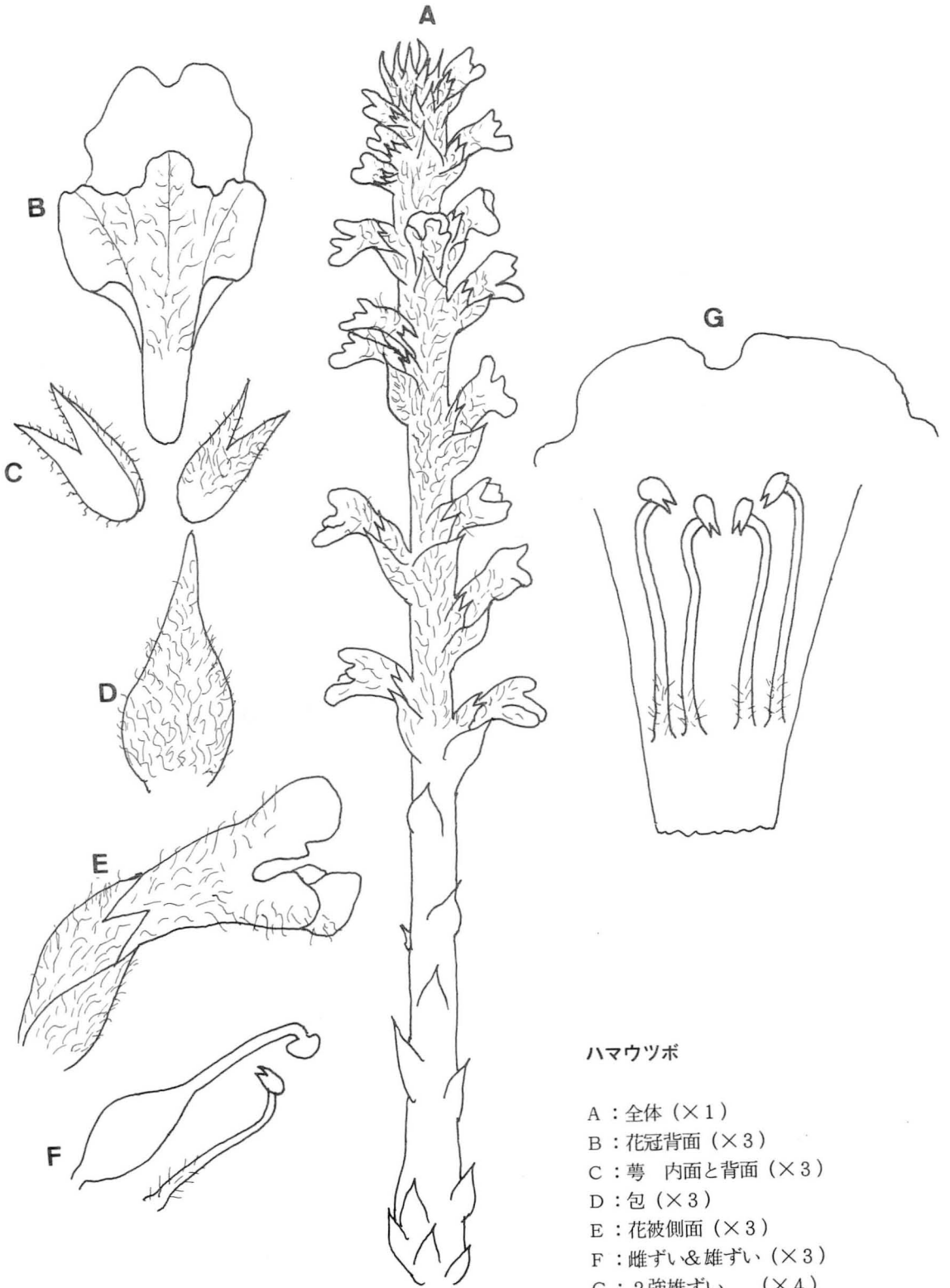
小崎昭則:「文献に記録された当地域の植物から」,『多摩丘陵の植物第2号』P.P.28-33,多摩丘陵植物調査会,1992年。

#### ハマウツボについて

(城川四郎)

ハマウツボ *Orobanche coerulescens* Step h. は非常に珍しい植物というものではないが出会いのチャンスがなければなかなか標本が手にはいらない。県内の過去の記録はたくさんあり、植物誌調査期間中も口頭での観察報告はあったが、証拠標本は入手できなかった。今般、会員の山口育子さんが知人の採取したハマウツボを見て生育現場を確認され、自分で採集された標本も持参されたので同標本に基づく図を植物誌の補遺として報告する。採取日は本年6月5日、採取地は平塚市岡崎、鈴川沿いのサイクリングコースである。花冠・萼は紫色で基部は淡色、包・鱗片は褐色、子房は帯黄白色、花柱は淡紫色で平滑、柱頭は汚白色、花糸は白色で基部有毛、やくは白色で1端が尖る。雄ずい4本のうち腹面(唇弁側)の2本がわずかに短い。花軸、包、萼、花冠には白軟毛がかなり密にある。山口さんの観察によれば生育地周辺はヨモギだけでカワラヨモギもオトコヨモギもはえていなかったという。多くの文献ではハマウツボの寄主はカワラヨモギ、内陸型のオカウツボの寄主はオトコヨモギだけを記しているが寄主の選択性はそれほど厳密なものではなくヨモギ類には広く寄生するものであろうことを示す例として今回の事例はたいへん興味深い。





ハマウツボ

- A : 全体 (×1)
- B : 花冠背面 (×3)
- C : 萼 内面と背面 (×3)
- D : 包 (×3)
- E : 花被側面 (×3)
- F : 雌ずい&雄ずい (×3)
- G : 2強雄ずい (×4)

## 語尾が -aceae でない科名

(小原 敬)

国際植物命名規約 (1988) の18条1に「科名は複数形容詞で、名詞として用いる。それは所有格単数の語形変化を原形にもどしたその科に含まれている1つの属の合法名の所有格単数と語尾 -aceae とからつくられる・・・」とある (例: Salix → Salicis → Salicaceae)。

また古くから用いられてきた語尾が -aceae でない科名については、18条5に有効に発表されたものとして取り扱われると記してある。それは Palmae (Arecaceae, ヤシ科), Gramineae (Poaceae, イネ科), Cruciferae (Brassicaceae, アブラナ科), Leguminosae (Fabaceae, マメ科), Guttiferae (Clusiaceae, オトギリソウ科), Umbelliferae (Apiaceae, セリ科), Labiatae (Lamiaceae, シソ科), Compositae (Asteraceae, キク科) である。また、Leguminosae の亜科 Papilionoideae を独立させるときは、Leguminosae との互換科名として、Papilionaceae も保留されることである。これらの科名、例えば Gramineae も

Poaceae も互換科名として総て保留名表に収められている。

規約の主旨は科名はその科に所属する属の名に基づき、語尾を -aceae に統一して、一目で科名とわかるようにしよう、だが、植物学は歴史的所産であり、古くから用いられてきた上述の科名も全面的に使用禁止にする訳にはいかないで、認めようということにあると思われる。

さて、この点について『神奈川県植物誌1988』を見ると、旧来の科名を用いているもの (Palmae, Cruciferae, Leguminosae, Labiatae), -aceae 語尾を用いているもの (Apiaceae), 両者を併記しているもの (Poaceae (Gramineae), Asteraceae (Compositae)), 18条5と異なるもの (Hypericaceae) がある。

最後の Hypericaceae (1789) は上記の Clusiaceae (1836) より発表は早いが、A.L.Jussieu は、初め Hypericum の複数主格 Hyperica の形で発表している。この Hypericaceae も保留科名表に記されている。

このようにそれぞれの科名は違法ではないが、植物誌全体を通しての調整が望まれる。

## 1991年各メッシュ追加標本リスト その2 (県立博物館提出分)

イワガラミ TAM 海道 宮崎卓  
チョウセンキンミズヒキ HAK-4 駒ヶ岳 勝山輝男  
ヘビイチゴ HAK-2 芦川 浜中義治 MIA-3 塚原 浜中義治  
ヤマブキ HAK-4 早雲山 浜中義治 HAK-1 仙石原 浜中義治  
カナメモチ TO-3 横浜自然観察の森 林辰雄  
ミツモトソウ FUJ-1 藤野町 武井高  
キジムシロ MIA-3 狩野 浜中義治  
オヘビイチゴ TO-3 横浜自然観察の森 林辰雄  
オキジムシロ ISO 新杉田 浜中義治 HAK-5 湯本 浜中義治  
セイヨウミザクラ NAK 新港埠頭 吉川アサ子  
ウワミズザクラ TSR 獅子ヶ谷 高坂雅子  
MIA-2 明星林道 浜中義治  
ヤマザクラ x マメザクラ AT-3 田野 高坂雅子  
オオシマザクラ HAK-4 早雲山 浜中義治  
HAK-1 仙石原 浜中義治  
サトザクラ HAK-4 早雲山 浜中義治  
カスミザクラ MIA-1 地蔵堂 長谷川義人  
チョウジマメザクラ KI-2 宮ヶ瀬 小崎昭則他  
ノイバラ HAK-4 早雲山 浜中義治  
テリハノイバラ HAK-6 宮城野 浜中義治  
フエイチゴ HAK-6 宮城野 浜中義治  
バライチゴ YU-2 鍛冶屋 米山智恵子  
ニガクマイチゴ FUJ-2 舟久保 小崎昭則  
カナウツギ HAK-4 姥子 浜中義治  
ホドイモ HAK-2 畑引山 浜中義治  
カワラケツメイ MIA-2 飯沢 浜中義治  
フジカンゾウ YU-2 鍛冶屋 米山智恵子  
マルバヌスビトハギ KAZ 金沢八景 浜中義治

ヤハズソウ HAK-2 畑引山 浜中義治  
ハマエンドウ KAW 東扇島 小崎昭則  
マルバハギ MIA-3 狩野 浜中義治  
セイヨウミヤコグサ NAK 新港埠頭 吉川アサ子  
コメツブウマゴヤシ OD-3 国府津駅 浜中義治  
シロバナシナガワハギ KAZ 並木 浜中義治  
NAK 新港埠頭 吉川アサ子  
シナガワハギ NIS 臨港パーク 吉川アサ子  
NAK 新港埠頭 吉川アサ子  
ヤブツルアズキ TO-3 横浜自然観察の森 林辰雄  
ハリエンジュ HAK-2 畑引山 浜中義治  
クララ TO-3 横浜自然観察の森 林辰雄  
MIA-2 明星林道 浜中義治  
ムラサキクララ YU-2 鍛冶屋 長谷川義人  
クスマツメクサ ISO 新杉田 浜中義治  
コメツブツメクサ HAK-4 芦ノ湯 浜中義治  
NIS 臨港パーク 吉川アサ子  
タチオランダゲンゲ KAW 東扇島 小崎昭則  
ムラサキツメクサ OD-2 風祭 浜中義治  
モモイロシロツメクサ NIS 臨港パーク 吉川アサ子  
ツルフジバカマ SA-2 当麻 宮崎卓  
TO-3 横浜自然観察の森 林辰雄  
ホソバヤハズエンドウ ZU 新逗子駅 浜中義治  
ヤハズエンドウ HAK-6 強羅 浜中義治  
HAK-1 仙石原 浜中義治  
ミヤマタニワタシ KI-2 宮ヶ瀬 城川四郎  
クサフジ TO-3 上郷町 林辰雄  
カスマグサ OD-4 入生田 浜中義治 HAK-5 日崎 浜中義治

アメリカフクロ TO-3 横浜自然観察の森 林辰雄, HAK-5 山崎  
 浜中義治, KAZ 鳥浜町 浜中義治  
 カントウミヤマカタバミ HAK-1 姥子 浜中義治  
 フシネハナカタバミ HAK-5 畑宿 浜中義治  
 エゾタチカタバミ YU-2 鍛冶屋 長谷川義人  
 オッタチカタバミ NAK 本牧 小崎昭則  
 マツバニンジン KAW 東扇島 小崎昭則  
 コカラスザンショウ YU-2 鍛冶屋 長谷川義人  
 サンショウ OD-2 風祭 浜中義治  
 ニガキ AT-3 田野 高坂雅子  
 エノキグサ MIA-2 明星林道 浜中義治  
 ユズリハ HAK-5 湯本 浜中義治  
 トウダイグサ KAW 東扇島 小崎昭則, OD-2 府川 浜中義治  
 ナツトウダイ HAK-1 姥子 浜中義治  
 シラキ TO-3 横浜自然観察の森 林辰雄, HAK-5 湯本 内田藤  
 吉  
 アワゴケ KAZ 金沢八景 浜中義治  
 ドクウツギ HAK-5 二子山 浜中義治  
 ツタウルシ OD-2 風祭 浜中義治  
 イヌツルウメモドキ KAZ 並木一丁目 浜中義治  
 コマユミ MIA-2 丸太の森 浜中義治  
 サワダツ MIA-2 明星林道 浜中義治  
 マユミ MIA-3 塚原 浜中義治  
 ユモトマユミ YU-2 鍛冶屋 米山智恵子  
 ゴンズイ MIA-2 明星林道 浜中義治  
 オオモミジ OD-2 水之尾 浜中義治  
 ウラゲエンコウカエデ YAT 福田 武井尚  
 アワブキ HAK-4 湖尻 浜中義治  
 ミヤマハハソ HAK-4 湖尻 浜中義治  
 ツリフネソウ MIA-3 大雄町 浜中義治  
 サンカクヅル OD-2 風祭 浜中義治  
 ワタ NAK 新港埠頭 吉川アサ子  
 ギンセンカ NIS 南軽井沢 吉川アサ子  
 ゼニバアオイ NIS 楠町 吉川アサ子  
 マタタビ HAK-5 湯本 浜中義治  
 チャノキ HAK-1 仙石原 浜中義治  
 サカキ HAK-5 湯本 浜中義治  
 ヒメジャラ HAK-4 姥子 浜中義治  
 トウゴクヒメジャラ HAK-5 屏風山 勝山輝男  
 オトギリソウ OD-3 田代 浜中義治  
 クロテンコオトギリ HAK-5 畑宿 内田藤吉  
 キンシバイ HAK-1 仙石原 浜中義治  
 ナガバノスミレサイシン AT-3 田野 高坂雅子  
 タチツボスミレ YU-2 白銀林道 高橋秀男  
 アオイスミレ OD-2 風祭 浜中義治  
 ケマルバスミレ TO-3 横浜自然観察の森 林辰雄  
 コミヤマスミレ HAK-5 須雲川 内田藤吉, YU-2 鍛冶屋 長谷  
 川義人  
 ヒメスミレ YU-2 兎沢 米山智恵子, HAK-5 須雲川大沢 源流  
 勝山輝男  
 ニオイタチツボスミレ FU-3 片瀬山 高坂雅子, HAK-1 姥子  
 浜中義治  
 アカネスミレ HAK-5 湯本 浜中義治  
 ヒナスミレ HAK-5 須雲川 内田藤吉  
 アギスミレ HAK-5 お玉ヶ池 浜中義治, TSR 獅子ヶ谷 市民の  
 森 高坂雅子  
 キブシ HAK-1 金時山 浜中義治  
 コバノキブシ HAK-4 芦ノ湯 浜中義治, OD-2 水之尾 浜中義  
 治  
 ミツマタ HAK-5 須雲川 内田藤吉  
 サクラガンピ YU-2 鍛冶屋 米山智恵子  
 ヒメミソハギ KAW 東扇島 小崎昭則  
 ミズタマソウ OD-2 風祭 浜中義治  
 イワアカバナ YA-2 大雲山 勝山輝男  
 チョウジタデ NIS 浅間町 吉川アサ子  
 コマツヨイグサ HAK-5 山崎 浜中義治  
 オカウコギ OD-2 風祭 浜中義治  
 カクレミノ HAK-1 仙石原 浜中義治, OD-2 水之尾 浜中義治  
 ヤツデ HAK-4 早雲山 浜中義治, MIA-2 矢佐芝 浜中義治  
 ハリギリ MIA-2 明星林道 浜中義治  
 シラネセンキュウ AT-3 鞍掛沢 高坂雅子  
 マツバゼリ MI-1 子供の国 勝山輝男  
 コエンドロ KAW 東扇島 小崎昭則  
 ミツバ AT-3 鞍掛沢 高坂雅子  
 ヤブニンジン HAK-1 仙石原 浜中義治, HAK-4 湖尻 浜中義治  
 ヤマゼリ MIA-3 塚原 浜中義治  
 カノツメソウ AT-3 田野 高坂雅子  
 オヤブジラミ HAK-4 姥子 浜中義治  
 アキノギンリョウソウ TO-3 横浜自然観察の森 林辰雄  
 イチヤクソウ MIA-2 明星林道 浜中義治  
 ネジキ HAK-5 須雲川 内田藤吉  
 ヒカゲツツジ YA-6 玄倉林道 勝山輝男  
 スノキ YU-1 城山 長谷川義人  
 マンリョウ MIA-2 矢佐芝 浜中義治  
 カラタチバナ MI-1 新沼町 北川淑子  
 ミヤマタゴボウ HAK-1 金時山 浜中義治  
 ノジトラノオ TO-3 横浜自然観察の森 林辰雄  
 シナノガキ YU-1 桜山 宮崎卓  
 カキノキ OD-2 風祭 浜中義治  
 エゴノキ MIA-2 明星林道 浜中義治  
 フジウツギ HAK-4 箱根園 浜中義治  
 ホウライカズラ YU-2 鍛冶屋 長谷川義人  
 タンザワイケマ YU-1 桜山 宮崎卓  
 オオカモメヅル YO-5 三浦富士 勝山輝男  
 ヒルガオ HAK-1 仙石原温原 田中徳久  
 ネナンカズラ MIA-3 塚原 浜中義治  
 マルバアメリカアサガオ NIS 浅間町 吉川アサ子  
 マメアサガオ NIS 浅間町 吉川アサ子  
 ハリアサガオ YAT 福田 武井尚  
 マルバルコウソウ HO 花見台 吉川アサ子  
 ワルタビラコ MI-2 荏田町 北川淑子, KAW 東扇島 小崎昭則  
 サワリソウ HAK-4 姥子 浜中義治  
 ハナイバナ HAK-5 山崎 浜中義治  
 ノムラサキ NAK 新港埠頭 吉川アサ子  
 ヤマルソウ HAK-5 湯本 浜中義治  
 ヒレハリソウ HAK-5 小湧谷 浜中義治  
 キュウリグサ HAK-4 早雲山 浜中義治  
 コムラサキ TAM 早野 北川淑子  
 ヤナギハナガサ HO 帷子町 吉川アサ子  
 キランソウ HAK-1 仙石原 浜中義治  
 タチキランソウ YA-6 雨山峠 勝山輝男  
 ジュウニヒトエ KAW 東扇島 小崎昭則  
 ミズネコノオ NIS 浅間町一丁目 吉川アサ子  
 ナギナタコウジュ MIA-2 明星林道 浜中義治  
 ホトケノザ HAK-5 山崎 浜中義治  
 ヒメオドリコソウ HAK-5 山崎 浜中義治, HAK-1 仙石原 浜中  
 義治  
 テンニンソウ MIA-2 矢佐芝 浜中義治  
 コソロネ HAK-1 仙石原 浜中義治  
 ヒメジソ MIA-3 狩野 浜中義治, MIA-2 明星林道 浜中義治

(スペースの都合で残りは次号に掲載します)

## 事務局より

### 1992年度総会報告

去る4月25日土曜日に神奈川県植物誌調査会総会が県立博物館で行われました。まず1991年度の事業報告と決算報告が行われ、承認されました。続いて1992年度の事業計画と予算案が審議され可決されました。以下にその概要を報告します。総会の後には山本明氏より「三浦半島のハチジョウベニシダについて」、北川淑子氏（代理で勝山が報告）からは「ミズハナビとコアゼガヤツリについて」の2つの話題が提供されました。最後は最近話題の植物について会員がスライドを持ち寄り映写会を行いました。

### 1991年度事業報告

- 1991. 4. 20 1991年度総会（平塚市博物館）
- 1991. 7. 14 野外研究会（箱根屏風山）
- 1991. 7. 20 フロラカナガワ3 1号発行
- 1992. 1. 1 フロラカナガワ3 2号発行
- 1992. 4. 25 フロラカナガワ3 3号発行

### 1992年度事業計画

#### 1. 継続事業

##### ①分布図の精度を高める

現在神奈川県博保管分の約85,000点のパソコン登録が終了

東大、科博、都立大などの神奈川県産標本データの登録も少しずつ行いたい

##### ②植物誌の頒布

##### ③フロラカナガワの発行（年3回、6月、10月、2月頃を予定）

会員以外の購読希望者への販売 年間2000円  
バックナンバー：300円～1000円

##### ④合同調査・研究会の開催

野外研究会  
講演会

#### 2. 印刷物刊行事業

##### ①初山先生業績目録及び主要論文集（長谷川、小林、大森で担当）

##### ②故森茂弥氏遺稿の印刷刊行（高橋、城川、勝山で担当）

##### ③地域フロラの刊行

（編集担当：勝山輝男、田中徳久）